http://www.labornetjp.org
レイバーネット
日本から世界から はたらくものの 情報ネットワーク

NewsLetter
No.13
2004年8月1日

発行　レイバーネット日本
〒173-0036 東京都板橋区向原2-22-17-403
http://www.labornetjp.org
labor-staff@labornetjp.org
電話　03-3530-8590　FAX　03-3530-8578

世の中を良くしたいと思うのはステキなこと
―フランスで出会った抵抗の文化―

佐々木有美（ビデオプレス）

音楽グループ「ジョリ・モーム」（6月6日、パリ）

2002年秋にスタートした「レイバーフェスタ」も今年秋で3年目。今回から関西での開催も決まり「労働者文化」の新たな試みが開花しそうな予感がする。

時を同じく、哲学者の高橋哲哉氏、作家の徐京植氏などが中心になってこの秋『前夜』という季刊誌が創刊されることになった。７月３日の「創刊プレ対話集会」に参加した。集会のタイトルは「文化と抵抗」。戦争前夜を思わせるいまの日本に、文化的な抵抗の拠点を作ろうという『前夜』の呼びかけは、レイバーフェスタの精神にも通じるものがある。そして「文化と抵抗」という、この少し近寄りがたいふたつの言葉から、わたしは、ごく最近の体験を思い起こした。

6月初旬『人らしく生きよう』パリ上映会に参加した。このとき、ジョリ・モームという音楽グループの路上公演を見る機会があった。フランスの左翼運動の中では有名なグループらしい。カルチェラタンの裏道で、日曜日の午前11時から公演がはじまった。メンバーは9人。フランス革命時代の扮装をしている青年、60年代ファッションの女の子がいるかと思うと、戦艦ポチョムキンの水兵帽をかぶった女性がいたりして、時代も国もごちゃまぜのおもしろさ。赤旗とジョリ・モームの旗をかざす二人のメンバーが後方の台の上に陣取る。そして、ギター、ベース、アコーディオンなどの楽器とボーカルの組み合わせで、パフォーマンスをまじえながら、次々に歌が飛び出す。この日のように路上を占拠したり、デモや労働者の闘いに参加して歌や劇を披露するのが、かれらのやり方らしい。

歌うのは、マクドナルドのストライキ支援の歌や、9・11事件以後の世相を皮肉った歌をはじめ、ほとんどが政治性をもったオリジナル曲だ。たとえばこんな歌詞だ。「未来はグローバリゼーションの中にあるなどといっているのは誰か。貧困を利用して儲けているのは誰か。脅威と戦争を作りだしているのは誰か」。アップテンポのものが多いが、バラード風の曲もある。どれも型破りなほど自由だが、毅然としていて、エネルギッシュ、グイグイ引き込まれる魅力がある。

その観客だが、老若男女、通りかかった通行人が足を止めグルッと彼らをとりまいていた。小さな女の子が拍子をとりながら見ている。何人ものこども達が集中している姿にはほんとに驚いた。笑いのたえない路上公演の最後はインターナショナルでしめくくられた。

「世の中を良くしたいと思うのは、ステキなことなんだ！」というグループのリーダーのことばが印象的だった。街角でくりひろげられる誰にでもわかる「抵抗の文化」は、最高に魅力的だった。

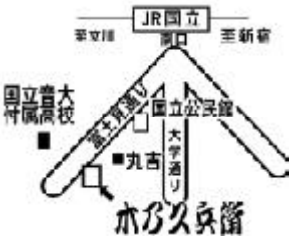
わたしたちが計画している「レイバーフェスタ2004」にも、そんなフランスの息吹が活かせればと思う。（なおジョリ・モームの路上公演を撮影したビデオをレイバーフェスタで上映する予定です）

例会案内 ポール・ジョバンさん&『人らしく生きよう』パリ上映会報告

８月７日(土)午後２時～５時　キノ・キュッフェ（居酒屋兼上映スペース）

JR国立駅南口徒歩12分　042-577-5971　**会費　3000円（軽食・ビール付き）**

『人らしく生きよう』パリ上映会は現地で大きな反響を呼びました。上映会に尽力したポール・ジョバンさんが7月末に来日しますので、それに合わせて「パリ上映会報告」の例会を開催することにしました。ジョバンさんは、パリ大学教員で日本の労働運動研究家です。気さくな人柄で、もちろん日本語は堪能。グローバルな労働運動の話が聞けるでしょう。また例会にはパリ訪問団の国労メンバー（山田則雄・大谷英貴・佐久間忠夫）も参加。報告ビデオ（ジョリモームあり）もあります。みなさんふるってご参加ください。



問われたレイバーネットの報道姿勢

―7/4ワールド・ピース・ナウ逮捕事件―

運動なのかメディアなのか？　7/4ワールド・ピース・ナウ弾圧事件とその報道をめぐって、レイバーネット日本ではさまざまな問題が提起され、緊急会議を開いてディスカッションを続けた。この間の会内議論はレイバーネット日本の今後にとって貴重なものになるだろう。

弾圧と報道をめぐって

伊藤　彰信　（レイバーネット日本代表）

「Vote For PEACE（平和のための投票）７．４渋谷」と名づけたイベントが、７月４日、ワールド・ピース・ナウ（以下「ＷＰＮ」と表示）の呼びかけで開かれ、集会後のパレードで３名が逮捕されました。その日のうちに逮捕後の警官とデモ隊の小競り合いとパレード後の集会を撮影した動画をレイバーネット日本のメーリングリストに転載不可の条件で配信しましたが、翌朝にはＷＰＮから配信を留保するよう要請を受けました。転載をおこなった人がいたため配信を中止しましたが、この間の意見交換は「弾圧と報道」に関して、特に運動の側に立った報道をしているレイバーネット日本として考えさせられることが多い内容でした。レイバーネット日本としてこの問題に関する緊急会議をおこないましたので、そこでの議論を踏まえて私なりの見解を述べたいと思います。

ＷＰＮは、当初、弁護士による救援に終始し、この弾圧に対してどう対応するのか明確な態度を決めかねていました。要請も「逮捕者が出ているのだから、映像の公開を保留してほしい」と言うもので、理由の説明も無いので「弾圧の事実を公開すべきではない」とも受け取れるものでした。レイバーネット内では「主催者が出さないでといっているのだから、出すべきではない」と言う意見と「弾圧の事実を知らせる役目がレイバーネットにはある」という意見がありました。この点については「主催者の意向を配慮しつつ、レイバーネット日本はメディアとして独自の判断をもって報道すべきだ」というのが私の見解です。

さて、掲載にあたってどのような判断基準をもつべきかと言う問題ですが、レイバーネット日本は、運動体の側に身をおく独立したメディアとして、インターネットの速報性を活かしながら、運動にとって事実にもとづく有益な情報は積極的に発信していくべきだと考えます。その場合注意する点は、(1)運動に敵対する内容にしない、（2）個人のプライバシーを侵害しない、(3) 当事者からのクレームに誠実に対応する、(4) 問題があれば個人の判断だけでなく、関係者や運営委員との話し合いをしながらすすめることです。

運動体の側のメディアでは、いままでは運動団体の機関紙（誌）による文章と写真が主なもので、速報性もった映像などはあまりありませんでした。インターネットは、画像、音声、動画などを配信できます。それはマスコミ報道のように一過性のものではなく、繰りかえし見聞きすることができるし、保存することもできます。レイバーネット日本の場合、会員であれば誰でも情報をウェブサイトに掲載することができます。それゆえ、報道にあたっては先のような基準が必要だと考えます。

今回の動画はほとんど問題が無いと思いますが、一部に運動体ならびに個人の了解を取るべき部分があることも事実です。したがって、動画は削除するとともに、イベントの様子と弾圧の事実を多くの人

インターネット・基本の基本　4)

バックアップは月一度

パソコンは三菱の自動車と同じくらいすぐ壊れる。だいたいウィンドウズは３年に一度動かなくなると思ったほうがいい。実際私のノートパソコンは「買って1年たらず」で突然起動しなくなり、再インストールする羽目になった。メーカーに聞いても「ウィンドウズではよくあること」と開き直られた。再インストールすればまた使えるようになる。しかしそれまでにつくったデータがすべて消えてしまうのだ。ということで、名簿や会計簿など重要なデータは月に一度は別の記録媒体（ＣＤ など）にバックアップするクセをつけよう。私はそうしていたので、被害は最小限ですんだが相当にストレスだった。パソコンはまだまだ欠陥商品であることを忘れずに。（松原）

に知らせる必要があると判断して、写真と記事をウェブサイトに掲載することにしました。

インターネットの出現によって運動体も自らのメディアを手に入れました。5月の例会でＷＰＮの高田さんと運動体のメディア・センターを検討しようと話し合ったばかりです。弾圧に対しては運動体が情報を管理統制するという発想から、弾圧を批判する世論形成を図るために情報戦にどう勝利していくのかという発想に転換する必要があると思います。その場合、映像は大きなインパクトを持っています。運動体としてインターネットをどのように活用していくのか、メディアは弾圧にどう対応すべきか、マスコミがこのような運動や弾圧を取り上げない中で、レイバーネット日本の役割を考えながら、運動体のみなさん、会員のみなさんと議論を続けていきたいと思います。（7月14日記）

（注）なお7月15日には3名全員が釈放された。

まずは「伝える」ことから

安田　浩一（ジャーナリスト・運営委員）

「レイバーネット」は、あらゆる団体や労組から独立した存在のメディアだと理解しています。その独立性、専門性を生かし、大手メディアが報じることの少ない社会・労働問題を、これまでにも正面から取り上げてきました。さらにネットという特性を利用し、メディアにとって大事な要素の一つである「速報性」をも駆使してきました。

映像であろうが、スチルであろうが、文字であろうが、まずは「伝える」こと、それがメディアの責任なのではないでしょうか（もちろん例外もありますが）。もしもそこで何らかの「不利益」を考えて、「伝える」ことそのものを最初から諦めてしまったならば、事実は限定的な空間のみで語られるだけとなり、メディアとしての役割も果たさないことになるのではないか、とも考えます。「運動の発展」のためには、それなりの「配慮」が必要であることも理解しています。しかし、「配慮」が適用される範囲って、どこまでなのでしょうか。あるいは、「掲載するな」との要請があれば、すべてを受け入れるべきなのでしょうか。当該の運動体の都合に振り回されて、結果的に事実を「なかったことにしてしまう」ことがあっても、仕方ないのでしょうか。

もしも安易な「配慮」を繰り返していくならば、「レイバーネット日本」には編集権も、編集の独立権も、ないことになります。運動体の都合によって掲載の有無が決められるとすれば、そもそも「メディア」とはいえないでしょう。せいぜいが「運動体の広報機関」か「宣伝機関」、あるいは一種の「サロン」になってしまうのではないでしょうか。

結局のところ、僕がどうしても言いたいことは次の一言に収斂されます。

僕たちは何も知らないままでよかったのか――。

＜５月例会報告・世界社会フォーラムと新しい民衆連帯の可能性＞

労組内に自主的反戦行動グループを

5月15日の例会は、「世界社会フォーラムと新しい民衆連帯の可能性」というテーマで、ムンバイ第４回世界社会フォーラムの報告とイラクでの日本人拘束を機に盛り上がった反戦運動とをつなげて議論しようという企画でした。参加者は全体で20名、内7名は会員外からの参加でした。最初に、小山帥人さんが制作したムンバイ報告ビデオ「もうひとつの世界は可能だ」を上映し、世界社会フォーラムに参加した人に前に出て発言していただきました。

次に第二部として、イラク日本人拘束事件の国会前行動映像「三人を救え！」を上映した後に、その行動の中心の１人であった高田健さん（WPN実行委員）にゲストスピーカーとして発言していただきました。

高田さんは、3人が解放された背景として（1）今井さんたちがイラク民衆の立場にたって活動してきたということ（2）日本の市民運動の役割（占領反対、自衛隊撤退）（3）平和憲法下で中東に軍隊を出さなかった日本の歴史、の三点を強調されました。

また、特に世界社会フォーラムなどでつながったイラクの民主化勢力とのインターネットを使ったネットワークが大きな役割を果たしたことが強調されました。日本のＡＴＴＡＣからフランスのコリン・コバヤシ氏、イラク民主化活動家のリカービ氏などを通じて迅速に正確な情報が伝えられたことは重要だったようです。

討論のなかでは、国会前行動に労働組合が迅速に取り組めなかったが、それはどうしてだったのかをめぐって議論がなされました。労働組合の場合は、各種の機関決定を経ないと行動が組みにくいということがあったようですが、そうしたことを越える技術的な方法が模索されていないことがより問題のように私は個人的に思いました。

参加者からは、労働組合内にすぐに反戦運動などで行動を組めるような相対的に自由な組織を横断的につくるなどの方法もあるのではないか、という積極的な提起もありました。制約された時間でしたが、非常に内容の濃い例会でした。　（河添　誠）

大阪でレイバーフェスタの準備始まる

お楽しみはこれからだ

小山帥人（レイバーネット日本運営委員）

アメリカでメディアを駆使して労働運動をしているスティーブ・ゼルツァーさんが大阪に来るたび、サンフランシスコのレイバーフェスタの宣伝をして、大阪でもやるべきだと力説してくれたが、賛同の声は多くなかった。大阪の労働運動の担い手たちは、なぜか真面目な人が多く、歌を唄うのも苦手で、踊りもやらないし、まして映像なんか、という感じだったのである。

だけれど、一昨年、東京でレイバーフェスタが成功したという話が伝わってきて、「大阪もなんかやらな、あかんな」、という雰囲気が出てきた。とにかく、一度声をかけあって、映像や労働に関心のありそうな人に呼びかけてみようということになって、6月２５日に第一回の打ち合わせが行われたしだい。

集まったのは、幾つかの労働組合の活動家や映像作家たち１５人、まだ初めての顔合わせで、何をやるかのイメージも固まっていないが、１２月５日の実施、３分テレビの募集、市民メディアねっとのデジタルビデオ制作講座への協力などが決まった。

とにかく、堅苦しいものではなく、若者にもアピールする楽しいフェスタをめざそうということになった。さて、どんなアイデアが飛び出すか、お楽しみはこれからだ。

郵政4.28事件　高裁で逆転勝訴

少し明るい話題が続いています。労働運動の流れが変わるといいですね。

イセキ開発工機訴訟 一括和解成立！

西本敏子（イセキ開発工機訴訟原告）

前号の＜新入会員紹介＞欄で争議報告をしたばかりでしたが、6月14日に東京高等裁判所で一括和解が成立しました。平成11年11月32%賃下げ、12年6月提訴、２年間は在職裁判でしたが、14年7月に民事再生下で整理解雇されて通算約５年の闘いでした。6月22日に和解調書を入手しましたが、何と2日後の24日に社長がインサイダー取引容疑で告発され、ＴＶや翌朝の新聞で大きく報道されて驚かされるというおまけ付きの争議解決となりました。

闘いの成果は勝利判決です。タイミングよく２件の判決とも７月発行の「労働判例」に掲載されました。この判決が活用されることを願っています。私は18年前に帰化しましたが、大阪生まれ大阪育ちの在日韓国人です。今後は外国人労働問題も勉強していきたいと思っています。イセキ開発工機訴訟についてのお問合せはメールでお寄せ下さい。私の経験が参考になれば嬉しいです。メールアドレス：nissy_tossy@ybb.ne.jp

(1)【労働判例】 №８６９　2004/7/1号イセキ開発工機(賃金減額)事件　(東京地裁平成15.12.12判決)新就業規則による格付け変更の効力と差額賃金･慰謝料請求(2)【労働判例】 №８７０　2004/7/15号イセキ開発工機（解雇）事件　(東京地裁平成15.12.22判決)出向社員に対する所属部門の閉鎖を理由とする解雇

木下昌明さんが新刊『映画がたたかうとき』

会員の木下昌明さんが新刊『映画がたたかうとき』を上梓した。フェスタでおなじみのマイケル・ムーアやケン・ローチなど「現代と向きあう映画人」にスポットをあてている。「壊れゆく＜現代＞を見すえた」社会時評集でもある。2200円。ビデオプレス（TEL03-3530-8588）で好評取扱中。

レイバーネット日本の会員になりませんか

会員になれば、自分でニュースやイベント、お知らせを提供できます。レイバーネット日本は組合で個人で全国にアッピールする絶好の場所です。

年会費　3,000円
郵便振替　00150-2-607244
レイバーネット日本
郵送宛先
〒173-0036 東京都板橋区向原2-22-17-403
レイバーネット日本事務局
入会申込用アドレス
apply@labornetjp.org
電話　03-3530-8590
ファクス　03-3530-8578

（イラスト：広浜綾子）